

任誓にんせいと寺庵じあん騒動

能美郡の村々に定着した真宗の教えは、白山麓ふしげの二曲ふしげ（現在の白山市出合）で、一人の人物を生んだ。俗名を与三郎よさぶろうといい、東本願寺の学僧えんそう恵空えくうに学んだと伝える任誓である。

始めると、おのずと同行衆どうぎょうしゅうが形成された。郡内の僧侶にはこれを批判するものもあつたが、小松本覚寺ほんかくじにとまなわれて上洛、東本願寺十六代一如いちにょから御書ごしょを授与されると、批難は沈静

化していった。しかし白山麓にとどまることなく、郡内の平野部でも法談に及び、評判を呼ぶと、ついに享保八年（一七二三）、



任誓像(白山市上出合) 任誓の碑の下部に安置。生家跡から現在地に移る。



小松市指定文化財 烏鬼記(稱名寺所蔵) 筆者は勝光寺11代周好。明和6年(1769)1年分の記録で、乾坤2冊からなる。翌年におこった寺庵騒動を考えるうえで重要な史料。

藩によって召捕られ、河北郡十村中に預けられ、翌年没した。

任誓を生んだ能美郡の同行衆は、文禄四年（一五九五）東本願寺十二代教如より授与された顕如と親鸞影像二幅を郡中御影と呼んで、奉持していた。この郡中御影をめぐって、明和五年（一七六八）本山から任誓派への教誡と、本山への支援の強化が求められると、これまで御影を一年ごとに保管していた御役仲間六か寺が分裂した。本山は一件を解決すべく、郡中御影と六か寺に上洛を求めたが、これによ



郡中御影(親鸞)(勸歸寺保管) 教如が能美郡四日講窓道場に授与したもの。文禄4年は教如が豊臣秀吉によって隠退させられた2年後で、教如を支持する門徒の存在が確認できる。

って御影が金沢御坊付きとなるのではとの風聞がたち、同六年八月の郡中御影の報恩講で同行中は上洛の反対を表明した。同七年（一七七〇）二月本山使僧による上洛の強行に、反対する白山麓幕領十八か村をはじめとして郡内の門徒が小松に押かけ、寺院・門徒宅を破却した。騒動の結果、御影は勸歸寺に預け置くこととなった。

任誓事件と寺庵騒動の背景には、同行衆の主導による真宗の教えの受容と定着があったのである。（木越祐馨）



(安永3年、1774)8月5日 東本願寺家老連書書状(後半、勸歸寺所蔵) 寺庵騒動後、郡中御影を勸歸寺に預け置くようにとの東本願寺19代乗如の指示を伝えたもの。